

第三章 資本の蓄積——生産的労働と非生産的労働

ある種の労働は対象の価値を高め、そうでない労働もある。前者を生産的労働、後者を非生産的労働と呼ぶ。製造業の労働は、材料に賃金分と利潤分を上乗せして価値を増やすが、家内使用人の労働は対象の価値を増やさない。製造労働者の賃金は前払いであっても、完成品の付加価値に含まれて利潤とともに回収され、雇い主の純費用にはなりにくい。他方、家内使用人の維持費は回収されない。ゆえに、多くの職工を雇えば富み、多くの家内使用人を養えば貧しくなる。ただし、使用人の労働にも社会的価値があり、正当な報酬を受ける資格があることは当然である。決定的な違いは、製造の労働が市場で売れる財に固定・実体化され、完了後もしばらく残る点にある。これは貯蔵された労働とみなせ、その財や価格は、必要なら元の生産に投じられたのと同量の労働を再び呼び起こし得る。これに対し、家内使用人のサービスは売買可能な財に固定されず、提供の瞬間に消え、のちに同量のサービスを賄えるような価値をほとんど残さない。

社会で最も尊敬される部門の一部の労働も、家内使用人と同様に、売買可能な財を生まない非生産的労働であり、働き終えても後に同量の労働を購える恒久的な商品として

は残らない。たとえば、君主・司法や軍事の官吏・陸海軍は公衆の使用人で、他者の産業が生む年々の産物の一部で養われる。彼らの奉仕はどれほど名誉・有用・必要でも、後日に同量の奉仕を买える形の産出を残さず、今年の保護・安全・防衛の成果が来年分を买う力にはならない。同様に、厳肅で重い職から輕妙な職まで、聖職者・法律家・医師・各種の文筆家・俳優・道化・音楽家・歌劇の歌手や舞踊家の仕事も、生まれた瞬間に消え、後に等量の労働を調達し得る対象を残さない。ただし、これらの労働にも固有の価値があり、正当な報酬に値することは言うまでもない。

生産的な労働者も非生産的な労働者も、働かない人々も、皆その国の土地と労働が生む年間の産出で養われる。産出は豊かになり得ても無限ではなく必ず限界があるから、ある年に非生産的な人の維持に回す比率が高いほど生産的な人に残る取り分は減り、低ければ増える。その結果、翌年の産出は前者で小さく、後者で大きくなる。大地の自然の恵みを除けば、年間の産出はすべて生産的労働の成果である。

各国で一年に土地と労働が生み出す産出は最終的に住民の消費と所得を支えるが、市場に最初に現れる段階では自然に二つに分かれる。第一は、たいいてい最大の取り分である資本の補填、すなわち資本から取り崩して使った食料・原料・製品の補充である。第

二は、所得の取り分で、資本所有者には利潤として、別の人には地代として分配される。たとえば農業では、一部が農家の資本回復に充てられ、残りが農家の利潤と地主の地代となる。大規模製造でも同様で、最大の部分が事業主の資本を置き換え、残りが利潤として資本所有者の所得を成す。

年間産出のうち資本の補填に回る分は、直接には生産的労働者だけを支え、支払いも賃金に限られる。これに対し、利潤や地代としての収入部分は、生産的・非生産的を問わず、働き手の生活の維持に用いられる。

人が手持ち資金の一部を資本として投じるとき、その分が利潤を付して戻ると見込む。ゆえに、その資本は生産的な労働者の維持にだけ使われ、資本としての役目を終えれば労働者の所得に変わる。他方、非生産的な人員の維持に回した分は、その瞬間に資本から外れ、直ちに当座の消費資金へ振り替えられる。

非生産的な働き手や無業者は、収入で生計を立てる。その財源は二つある。第一は、年産のうち地代や利潤として最初から個人の収入に組み込まれている取り分。第二は、資本の回復と生産的労働者の維持に充てべき取り分のうち、必要扶養を超える余剰で、最終的に生産的か否かを問わず人々の生活に回り得る分である。ゆえに、大地主や富裕

商人のみならず、賃金に余裕のある熟練工も、召使いを雇い、芝居や人形芝居に通い、税を納めて、非生産的な人びとや、より名譽・有用ではあっても同じく非生産的な別の集団を養う。ただし、資本の回復に向けた取り分が非生産的な手の維持に回るのは、その資金が本来の役目である生産的労働を最大限稼働させた後に限られる。労働者がこうした支出に充てられるのは賃金の余りだけで、額は概して小さいが、人数の多さが税の場面ではその小口を積み上げる。結局、非生産的な人々を主に養うのは地代と利潤であり、これらは余剰が生じやすく、理論上はどちらにも回し得るが、現実には非生産的な方へ流れがちである。大貴族の出費は多くの場合、勤勉な人より遊惰の人の口を多く養い、富裕商人も資本では勤勉な人を雇いながら、収入の使い道ではたいい貴族と同じ層を養っている。

したがって、生産的な人手と非生産的な人手の比率は、年産のうち、生産現場を出た直後に資本の補填に回る部分と、地代や利潤として収入に振り向けられる部分の比率に強く依存し、この比率は富裕国と貧困国で著しく異なる。

現在の欧州の富裕国では、土地の収穫のうち大きな、しばしば最大の部分が、独立自営の富農の投下資本の補填に充てられ、残りがその利潤と地主の地代になる。これに対

し封建期には、耕作に要する資本はごくわずかで、荒地の草に頼る粗末な家畜のように、ほとんど自然の産物と見なせるものが中心であり、その多くは地主の所有物として占有者に前貸しされていた。收穫の残余は地代か、わずかな資本から生じる利潤として、結局は地主の取り分となった。占有者の多くは隷屬身分で、そうでない者も随意小作で、名目の負担が軽くとも實際は收穫のほぼ全量を差し出し、領主は平時の労役も戦時の奉公も随時命じ得た。すなわち、その土地で養われる人々の労働と奉仕を自由に差配できる者が、收穫のすべてを實質的に支配していたのである。今日の欧州では、地主の取り分が總收穫の三分の一を超えることは稀で、四分の一に満たないこともある。他方、改良の進んだ地域の地代は往時の三〜四倍に達し、今の三分の一や四分の一が、かつての總收穫そのものの三〜四倍に当たる。要するに、改良が進むほど地代は絶対額では増えながら、收穫に対する比率は低下する。

現在の欧州の富裕国では、貿易・商業と製造に巨額の資本が投じられている。これに比べ、昔の取引や素朴な製造に要した資本は小さかったが、利回りは高く、当時の利率は各地で年十%を下回らず、企業の利益はその高利に見合っていた。今日の先進地域では金利は高くても六%で、さらに進んだ地域では四%、三%、二%まで下がる。資本

利潤に由来する所得が貧しい国より富裕国で多いのは、資本の規模がはるかに大きいからであり、資本に対する利回り自体は総じて低い。

したがって、収穫・生産の直後に資本の補填に回る年産の取り分は、貧困国より富裕国でずっと大きく、地代や利潤としてただちに収入化される分に対する比率でも明確に上回る。生産的労働を維持する基金は、富国では量も割合も厚く、しかも、生産・非生産のどちらにも使えるが実際には非生産に偏りがちな資金より、相対的に大きな比重を占める。

生産に従事する人びとと歳出で養われる人びとの割合は、その国の年産が「資本の補填」に回る分と、「地代・利潤」として直ちに収入化される分との比によって定まる。

今日の私たちが祖先より勤勉なのは、怠惰を支える原資よりも産業維持の原資の方が二、三世紀前よりはるかに厚くなったからである。「ただ働きするくらいなら遊んだ方がまし」という諺が示すように、報いなき労働は続かない。資本の雇用が下層を養う商工都市では、人びとは概して勤勉・儉約で、町は発展する。イングランドの多く、オランダの大半がその例である。これに反し、宮廷の常住や行幸がもたらす歳出に依存する都市では、下層は怠惰・放縦に流れ、貧困が目立つ。ローマ、ヴェルサイユ、コンピエ

ーニュ、フォンテーヌブローが典型である。フランスの高等法院所在都市も、ルーアンとボルドーを除けば商工が弱い。下層が裁判所関係者や訴訟人の支出に頼るため総じて怠惰で貧しいからである。対照的に、ルーアンはパリ向け内外貨の集散地、ボルドーはガロンヌ流域の輸出用ワインの集散地で、地の利が大資本を呼び込み、その運用が産業を生む。他の高等法院都市で動く資本は、自家消費を賄う最小限にとどまる。この事情はパリ、マドリード、ウィーンにも当てはまり、三者のうち最も勤勉なのはパリだが、その製品の最大市場は自市で、取引の主眼も自家消費である。欧州で宮廷常住と広域商業都市を両立し得ているのは、ロンドン、リスボン、コペンハーゲンくらいで、いずれも遠隔地向け貨物の天然の中継点に位置する。巨額の歳出が恒常的に流れる都市では、自家消費を超える用途で資本を有利に雇いにくい。歳出で養われる多数の怠惰が、資本雇用で支えられるべき勤勉を蝕み、資本運用の妙味を削ぐからである。合同前のエディンバラは商工に乏しかったが、議会が召集されず名門が常住する必要がなくなると、一定の商工都市となった。それでも最高裁判所や関税・物品税局が置かれ歳出はなお厚く、資本雇用で住民が養われるグラスゴーに比べると、商工では見劣りする。製造が進んだ大きな村でも、近隣に大貴族が居を構えると、住民が怠け貧しくなることがある。

要するに、資本と収入の比率が、その地域の勤勉と怠惰の度合いを左右する。資本が優勢なら産業は伸び、収入が優勢なら怠惰が広がる。ゆえに資本が増えれば、生産的に働く人が増えて産業の実量が拡大し、減れば縮む。その結果、土地と労働の年産の交換価値、すなわち住民全体の実質的な富と収入も、それに応じて増減する。

資本は儉約で膨らみ、浪費や誤った運用で痩せ細る。

収入からの節約は資本に組み入れられ、持ち主はそれで新たに生産的な人手を雇うか、利子付きで他者に貸して同じ働きを担わせる。個人の資本が年々の収入や利益からの貯蓄でしか増えないのと同様に、個人の集合である社会全体の資本（構成員の資本の合計）も、この方法でしか拡大しない。

資本を増やす直接の要因は儉約であり、勤勉は儉約が貯める元手を生むにすぎない。どれほど所得があっても、儉約して貯めなければ資本は増えない。

儉約は、生産的な人手を支える資金を厚くし、付加価値を生む担い手を増やす。結果として、国の土地と労働が生む年産の交換価値が高まり、新たな産業が動いて、年産にいつそうの価値が上乘せされる。

毎年の貯蓄も支出も、ほぼ同時に規則的に消費されるが、消費者は異なる。富者の支

出は多くの場合、遊興客や家内使用人に渡り、持続的な価値を残さない。他方、貯蓄は利潤を求めてただちに資本化され、労働者・製造業者・職人に消費され、彼らは自らの年間消費の価値を利潤とともに再生産する。収入を貨幣で受け取り全額を費やせば、その貨幣で買う衣食住は前者に配られるが、一部を貯蓄して資本に回せば、その分の衣食住は後者に回る。要するに、総消費は同じでも担い手が違う。

儉約による毎年の貯蓄は、当年や翌年の追加雇用を支えるだけでなく、将来も同数の生産的労働者を養う恒久基金を事実上生み出す。それは成文法や信託で常に保証されるとは限らないが、持分を得る各人の明白な自己利益という強い原理が実質的な歯止めとなり、本来の目的から外して非生産的な維持に回せば、当人に明らかな損となる。

放蕩は、収入を超えて支出し資本を食い減らし、資金の本来用途を狂わせる。すなわち、先人の儉約が産業維持のために蓄えた資金で怠け者に報酬を払うのと同じであり、生産的労働に充てる基金が減れば、その人の分だけ付加価値を生む労働が縮み、土地と労働の年産の交換価値、すなわち実質的な富と歳入も低下する。誰かの儉約が補填しなにかぎり、これは勤勉の糧を怠け者に回す行為となり、本人のみならず国も貧しくする。浪費がすべて国産品への支出であっても、結末は同じである。本来は生産的労働者を

養うはずの食と衣の一部が毎年非生産的な維持に回るため、国の土地と労働が生む年間の産出価値は本来得られる水準からその分だけ低下する。

確かに、支出が外国品でなければ金銀の流出は起こらず、国内の貨幣量は変わらない。しかし、その食と衣が生産的労働者に渡っていれば、その分は利潤を付して再生産され、貨幣は同じだけ国内にとどまり、同額の消費財が新たに生まれたはずである。すなわち、価値は一つではなく二つ生じていたことになる。

年々の産出が細る国に、以前と同じ量の貨幣が長くとどまることはない。貨幣は消費財を流通させるための道具にすぎず、その国で一年に動く貨幣の量は、国内で流れる消費財の価値によって定まる。消費財は国内の土地と労働の直産か、その一部で買い入れたものに限られるから、直産の価値が落ちれば、消費財の価値も、流通に要る貨幣の量も揃って縮む。国内の循環から余った貨幣は死蔵されず、持ち主の利害に従って、たとえ法の禁圧があっても海外へ向かい、国内で役立つ消費財の購入に充てられる。その結果、当面は自国の年産を超える消費が、外へ出た金銀によって下支えされる。すなわち、金銀流出は衰退の原因ではなく結果であり、むしろ短期的には困窮をやわらげる働きをもつ。

これに反して、各国の貨幣量は年産の価値が高まるほど自ずと増える。毎年流通する消費財の総価値が大きいほど、それを回すための貨幣も多く要るからである。ゆえに、増えた産出の一部は、必要な追加の金や銀を入手できる市場での購入資金に振り向けられる。このとき金銀の増加は繁栄の原因ではなく、その結果にすぎない。金銀の取得はどこでも同じで、鉱山から市場へ運ぶ人々の衣食住、すなわち彼らの維持と収入がその対価である。この代価を払える国は必要な金銀を長く欠かさず、逆に不必要な過剰を抱え続けることもない。

結局、国富や国収入を理にかなって土地と労働の年産価値に求めようと、通俗的に国内の貴金属量に求めようと、結論は同じである。浪費する者は公の敵であり、儉約する者は公の恩人である。

資本の誤運用は、多くの場合、浪費と同じ結末を招く。農業・鉱業・漁業・商業・工業のいずれであれ、見通しの甘い失敗した企ては、生産的労働を支える資金を減らす。資本を生産に投じても、運用が拙く使った分の価値を取り戻せなければ、社会の生産基金は本来より削られる。

とはいえ、大国の進路が個々の浪費や失敗だけで大きく変わることは稀である。一部

の過度な出費や軽率さは、多くの人びとの儉約と良識ある行いによって、たいてい十分に埋め合わされるからである。

浪費を生むのは目先の快楽であり、ときに抑えがたいほど強まるが、たいていは短く、たまに起こるにすぎない。これに対し、貯蓄を生むのは境遇を良くしたいという静かな欲求で、生まれつき備わり死ぬまで消えない。人生のどの時期にも、現状に完全に満足し何の改善も望まない瞬間はほとんどなく、多くの人にとって境遇を良くする手段は財産を増やすことであり、その最も分かりやすい方法は収入の一部を定期的または臨時に貯えることである。ゆえに、支出の原理が誰にでも時には（ある人にはほとんど常に）勝つとしても、人生全体で見れば、より多くの人びとでは儉約の原理が優位に立ち、その優位は大きい。

誤った経営について言えば、どこでも分別と慎重さに基づく成功が、軽率な失敗をはるかに上回る。破産が多いとの嘆きは絶えないが、実際にその不運に陥るのは、商業や各種の事業に従事する人びとのごく一部で、多くても千人に一人、すなわち千分の一ほどである。破産は無辜の人にも起こりうる最も重く屈辱的な災難の一つであるが、ゆえに多くの人はそれを避けようと用心する。それでも、絞首台を避けない者がいるのと同

じく、避けない者もいる。

大国は私人の浪費や不始末では傾かないが、公の浪費と失政は別である。多くの国では、公収入の大半が非生産的な人手の維持に費やされる。豪華な宮廷や大規模な聖職機構、平時に何も生み出さず戦時でも費用を回収できない巨大な海軍や常備軍がそれであり、彼らは他人の労働の産物で養われる。これらが不要に膨張すると、その年の消費が過大となり、翌年の再生産を担う生産的労働者を支える資金が不足する。結果として翌年の産出は今年を下回り、混乱が続けば三年目はさらに縮む。本来、こうした維持は住民の余剰で賄われるべきだが、収入の大半を食い尽くし、資本（生産的労働の維持基金）まで取り崩す段階に至れば、個々の儉約や善政をもってしても、この強引な食い荒らしによる浪費と産出低下は補えない。

それでもなお、経験によれば、儉約と節度は多くの場合、個人の浪費や誤りはもちろん、政府の放漫財政すら補う。自分の境遇を良くしようと人が一様に絶えず努める力は、公私の富の源であり、政府の浪費や拙い統治があっても、社会を改善へ向かわせる自然の歩みをしばしば支える。いわば、見えない生命の原理が、病だけでなく医師の誤った処方にもかかわらず、身体に健康と活力を取り戻すのに似ている。

年産の価値を高める道は、生産的労働者の数を増やすか、既存の労働者の生産性を上げるかの二つだけである。前者は彼らを支える資本が増えなければ進まず、後者は労働を楽にし時間を短縮する機械や道具の導入・改良、または職務のより適切な分担によってのみ実現する。いずれにも追加資本がほぼ不可欠で、経営者がより良い機械を与えたり分業を高度化したりするには増資が要る。とりわけ工程が多い仕事ほど、各人の一つの工程に常時専任させる体制は、全員が工程を持ち回りする体制よりはるかに大きな資本を要する。ゆえに、同じ国の二つの時点を比べ、後の時点で年産の明らかな増加、耕地の改善、製造の多様化と活況、交易の拡大が見られるなら、その間に資本が増え、個々人の健全な経営による蓄積が、私的な過失や政府の浪費による取り崩しを差し引いても上回ったと判断できる。こうした傾向は、おおむね平穏な時期には、必ずしも最も儉約な政府でなくとも多くの国で当てはまる。正しく評価するには、やや長い期間で比べることが欠かせない。進歩はしばしばゆっくりで短期には見えにくく、国全体が繁栄していても特定の部門や地域が後退し、それを見て「国全体が衰えた」と疑われがちである。

たとえば、イングランドの土地と労働の年産は、チャールズ二世の王政復古（一世紀

余り前)の時期より確実に大きい。いまやこの事実を疑う人はほとんどいない。それでもこの期間を通じ、ほぼ五年おきに「国富は急速に痩せ細り、人口は減り、農業は見捨てられ、製造は凋落し、交易は瓦解した」と訴える本や小冊子が、公的な影響力すら得るほどの筆力で刊行され続けた。しかも、それらがすべて党派的な駄作というわけではない。多くは、誠実で見識ある筆者が、心からの確信に基づいて書いたものである。

王政復古期のイングランドの年産は、約一世紀前のエリザベス即位期より明らかに大きく、エリザベス期も、さらに一世紀前のバラ戦争終盤より改良が進んでいた。おそらくその段階でもノルマン征服期を上回り、ノルマン征服期はサクソン七王国の混乱期より良好であった。さらにさかのぼれば、ユリウス・カエサル of 侵略時には住民の生活水準は当時の北米先住民に近かったが、それ以後のイングランドはすでに「より改良された国」へと歩みを進めていたと断じてよい。

どの時代にも民間と政府の浪費が多く、無用で費用の重い戦争も繰り返してきた。年産は生産的な活動から非生産的な人員の維持へ大きく振り向けられ、内乱は資本そのものの絶対的破壊を招き、富の自然な蓄積を遅らせ、ときに年末の国力を年初より弱めかねなかった。しかも最良とされる王政復古後ですら、事前に知っていれば窮乏どころか

破滅さえ連想したのであろう出来事が相次いだ。すなわち、ロンドン大火とベスト、二度の対オランダ戦、名誉革命の混乱、アイルランド戦、さらに対仏四戦（一六八八年、一七〇二年、一七四二年、一七五六年）と、一七一五年・一七四五年の反乱である。対仏四戦だけで、国は臨時の年次支出とは別に一億四千万ポンド超の新規国債を抱え、総額は少なく見積もっても二億ポンドに達した。革命以降、国土と労働の年産の大きな部分が非常時に膨らんだ非生産的な人員の維持に費やされたのである。もし戦争がなかったなら、この巨額の資本は自然に生産的な活動へ向かい、消費を利潤とともに再生産して年々の年産価値を高め、その増加が翌年をさらに押し上げる好循環を生んだはずだ。住宅は増え、土地改良は進み、耕地はよりよく耕され、工場は新設や拡張が進み、この国の実質的な富と歳入は、いまよりはるかに高く、想像もつかない水準に達していたであろう。

政府の放漫はイングランドの富と改良の自然な歩みを確かに遅らせたが、止めることはできなかった。今日の年間生産は王政復古や名誉革命の頃よりはるかに大きく、それだけ耕作や雇用を支える資本も増えている。重税下でも、この資本は、私的な儉約と節度、すなわち暮らしを良くしようとする絶え間ない努力によって静かに蓄積されてきた。

この努力は法の保護と自由のもとで最も力を発揮し、これまでイングランドの富と改良を支えてきたし、これからもそうであってほしい。とはいえ、イングランドに儉約な政府はほとんどなく、儉約は国民の顕著な美德でもない。それなのに、王や大臣が私的家計に口を出し、贅沢禁止や外国製贅沢品の禁輸で支出を縛るのは著しい越権である。彼らこそ例外なく最大の浪費家なのだから。まず自分たちの支出を厳しく律し、民の支出は民に委ねるべきである。国を減ぼすのは為政者の放漫であり、民の散財ではない。

儉約は公的資本を増やし、浪費はそれを減らす。収入と支出が等しく、貯蓄も取り崩しもしなければ、公的資本は増えも減りもしない。ただし、同じ支出でも国の富を伸ばす効果が大きい場合とそうでない場合がある。

収入の使途は二つに大別できる。ひとつは、その場で食いつぶして翌日に寄与しない即時消費、もうひとつは蓄えとなり、日々の支出が翌日の効きを支え増やす耐久的な対象への支出である。資産家なら、豪華な宴や多くの召使い、犬や馬の維持に費やすこともできるし、質素に暮らして、邸宅や別荘の装飾、実用・装飾の建築や家具、書物・彫像・絵画の収集、さらには宝飾や小玩具、極端には衣装の大量保有に回すこともできる。同じ財力の二人が一方は前者、他方は耐久財中心に支出した場合、後者は日々の支出が

翌日に積み重なるぶん、壮観さが時とともに増す。前者は期間の終わりでも見栄えが最初より良くならない。しかも期末の富でも後者が上回る。買いそろえた財は元値どおりではないにせよ、何らかの価値が常に残るからである。一方、前者の散財は跡を残さず、十年、二十年の奔放な出費の果実も、初めからなかったかのように消え去る。

個人の富を増やす支出の仕方は、そのまま国の富にも利く。富裕層の家や調度、衣服は、やがて下層・中間層へ移り、社会全体の住まいと暮らしの質を底上げする。豊かな時代が長い国では、本来は現住者向けでなかった堅固な家や良質な家具が下層の手にあることが少なくない。たとえば、セイモア家の旧邸は今やバス街道の宿屋となり、デソマークから英国王ジェームズ一世に贈られた婚礼寝台も、近年までダンファームリンの居酒屋を飾っていた。長く停滞した古都ややや衰退した都市では、現住者のために建てられた家がほとんど見当たらず、内部には古色を帯びながら今も実用的な上等の家具が残ることが多い。壮麗な宮殿や別荘群、書物・彫像・絵画などの大コレクションは、地域だけでなく国家全体の装いであり誇りでもある。ヴェルサイユはフランスの、ストウやウィルトンはイングランドの看板である。富を生んだ力が衰え、創造の才を持つ人々が職を失っても、イタリアはこうした記念物の多さゆえに、なお敬意を集めている。

耐久財への支出は、蓄えを増やすだけでなく、節約を続けやすくもする。使用人を大幅に減らしたり、豪華な食卓を切り詰めたり、整えた装束や馬車・供回りを畳むような「目に見える節約」は、人目に明らかで、過去の浪費を認めたと受け取られがちだ。ゆえに、この種の見栄の消費に踏み込みすぎた人ほど、破綻寸前まで改められない。他方、建築や家具、蔵書や美術品への消費を打ち止めにしても、軽率とは見られない。先の支出で「十分」に達しやすく、やめる理由が「資力が尽きたから」ではなく「満足したから」と理解されるためである。

耐久的な品への支出は、盛大な接待に同額を投じるより、ふつうはより多くの人々を養う。大宴会では、用意した数百ポンドの食材のうち半分が捨てられることも珍しくなく、無駄は避けがたい。だが、その費用を石工・木工・内装・機械の職人たちの仕事に回せば、同じ額の食料が、より多くの人びとに小口（ペニーやポンド単位）で行き渡り、ひとかけらも無駄にならない。しかも前者は生産的な働き手を、後者は非生産的な働き手を養う。ゆえに、前者の支出は国の土地と労働が生む年々の産出の交換価値を押し上げるが、後者にはその効果がない。

もつとも、ここで論じたいのは、どちらの支出が気前よく高尚かという徳目の比較で

はない。歓待に収入を投じる富者は、多くを友人や仲間と分かち合う。他方、耐久財の購入に傾く支出は、たいてい自分のためだけで、対価なしに他者へ与えることはまれである。ことに衣装や調度の小飾り、宝飾や小玩具といった些末な出費は、軽薄さのみならず、卑俗で利己的な性向を映すことがある。私が強調したいのは、耐久的な支出が価値ある財の蓄積を生み、個々の儉約を促し、その結果、公的資本を厚くし、非生産的ではなく生産的な働き手を養うぶん、公共の富の伸長にいつそう資する、という一点である。